バッジ・ウィルソン著、*Before Green Gables*：アニメーション『こんにちは　アン～Before Green Gables』との相違点とその効果

荒　木　陽　子

はじめに

異国において異なる言語を用いて書かれた文学作品の「翻訳」が、単に作品をひとつの言語から他の言語に置き換える作業ではなく、ある言語とその言語が使われる新しい文化の中に新しい作品を生み出す「創作」作業に近いことはよく知られている。また、言語が同じでも、別のメディアを用いて異なる時代とオーディエンスのための作品を作り出す行為も、竹内オサムが手塚治著『鉄腕アトム』の３回にわたるテレビ・アニメーション化の分析により示した通り、常に「原作」とは異なる新たな作品を生み出す作業とならざるを得ない。(1) 従って、日本において表現メディアに加えて、言語そして文化を超えて外国文学作品がアニメーション化される際に、原作とアニメーション化された作品に大きな乖離が生まれることは容易に予想される。

日本における外国文学作品のアニメーション化に関して最もよく知られているシリーズのひとつが、日本アニメーションが制作し、フジテレビ系列で放映されてきた「世界名作劇場」であり、1975 年の『フランダースの犬』をはじめに、2011 年 1 月現在までに 26 作品が放映されている。(2) 同シリーズの最新作は、カナダ、ノヴァスコシア州ハリファックス出身の作家バッジ・ウィルソン（Budge Marjorie Wilson 1927-）が 2008 年に出版した小説 *Before Green Gables*（邦訳タイトル『こんにちは　アン』、以下、原作小説については *Before Green Gables* と原題で表記）を原作として制作され、(3) 2009 年 4 月 5 日から 12 月 27 日まで BS フジで放映された『こんにちは　アン～ Before Green Gables』（以下、『こんにちは　アン』）である。(4) 原作の出版から半年足らずで翻訳され、翻訳の出版から一年に満たないうちにアニメーションの制作が行われたことから、日本におけるこの原作に対する関心の高さが分かる。アニメーションのタイトル中の「アン」とは、1979 年に世界名作劇場のひとつとしてアニメーション化され、同年の厚生省児童福祉文化賞を受賞した、カナダ、プリンス・エドワード・アイランド州出身のルーシー・モード・モンゴメリ（Lucy Maud Montgomery 1874-1942）の *Anne of Green Gables*（1908、邦訳タイトル『赤

毛のアン』、以下、原作小説については原題で表記）の主人公、アン・シャーリー（Anne Shirley）と同一人物である。[5] そして *Before Green Gables* は、*Anne of Green Gables* 出版100周年を記念する事業の一環として、ウィルソンが書き下ろした *Anne of Green Gables* の続編（prequel）なのだ。[6]

本稿は、小説 *Before Green Gables* と、同小説を原作として日本で制作されたアニメーション『こんにちは　アン』を、特にその物語の違いに注目して比較する。日本ではまだ知名度の低いウィルソンの紹介も含めて、言語・文化・社会的な距離を超えてある外国文学作品をアニメーション化する際に、どのような作品の改変が行われ、その改変がいかなる効果を持つのかを考察したい。

１．作家、バッジ・ウィルソンについて

はじめに、バッジ・ウィルソンについて、筆者が2010年7月28日に、ウィルソンのノヴァスコシア州ウエスト・コーヴ（West Cove）の自宅で行ったインタヴューも参考にしながら簡単に紹介したい。[7] 日本では、2008年7月に新潮社より出版された、*Before Green Gables* の宇佐美晶子による邦訳、『こんにちは　アン』（新潮社）が初めての訳出となる。しかし、ウィルソンは2011年1月までに、1984年に出版された『史上最高／最悪のクリスマス・プレゼント』（*The Best/Worst Christmas Present Ever*）以来、絵本、短編小説集、中・長編小説など33冊の書籍を出版しており、彼女の作品は14の言語に翻訳されている。[8]

ウィルソンは、代表作『旅立ち』（*The Leaving* 1990）が、カナダ国内の数々の文学賞に加えて、米国図書館協会（American Library Association）によって、「1993年ヤングアダルト向け最優秀書籍」(Best Books for Young Adults, 1993) の一冊として選出されるなど、特に北米の児童、ヤングアダルト向け文学の分野では高く評価されており、[9] その作品は国語の教材としても使用されている。また、社会的評価も高く、2004年出版の短編集『フレンドシップス』（*Friendships*）が2006年のカナダ総督賞（Governor General's Award）候補に選ばれている他、[10] ウィルソンに対しては2004年にカナダ勲功章（a Member of the Order of Canada）、そして2010年にはダルハウジー大学名誉博士号（Honorary LL.D., Dalhousie University）が授与されている。

ウィルソンの作家としてのスタートは遅い。しかし、その多彩なキャリアは後の作家活動に大きな影響を与える。ダルハウジー大学およびトロント大学大学院で哲学、心理学、英文学などの教育を受けたウィルソンが創作活動を始めるのは、当初秘書として働き始めたトロント大学こども研究所（The Institute of Child Study）に勤務していた頃である。

ウィルソンは同研究所に４年間勤務する中、次第に大学の出版物の編集やイラストレーションの作成も任されるようになったという。そして、結婚、出産を経てトロントから1989年までを過ごしたオンタリオ州ピーターボロ（Peterborough）に転居した後、子育ての傍らで商業芸術家、子供写真家、そしてフィットネス講師と多様な職業経験を積む。50代にさしかかり老眼の影響で納得のいく写真が撮れなくなったというウィルソンは、かねてから子供に自作のベッドストーリーを語ってきたこともあり、その創作活動の中心を執筆に移したという。(11)

さて、ウィルソンが最初の書籍となるノヴァスコシア州ルーネンバーグ（Lunenburg）郡に住む貧しい漁師の娘ロリンダ（Lorinda）を中心に、ノヴァスコシアの小さな漁港に住む人々の生活を描く、ロリンダ･シリーズ（1984~1991、全５巻）第一作目を出版した時、彼女は既に56歳になっていたが、一貫して子供と共に働き生活する中で得られたセンシティヴィティは、彼女の主として「子供、少年・少女時代を題材とする作品づくり」の中に生かされている。(12) しかし、同時にキャリアの初めに出版社により「子供向け」（for children）や「若者向け」（for young adults）として分類された作品で評価され、その後必ずしも「子供向け」でなくても子供や若者を中心人物とする作品や、子供、少年・少女時代を題材とする作品を多く書き続けてきたウィルソンは、「児童文学作家」（children's writer）としてのみ評価される傾向がある。ウィルソンは、このことについて複雑な思いを抱いており、経済的必要性から、当時商業的な児童文学作品群と看做されていたアン・シリーズを書き続けざるを得なかったモンゴメリの経験に自らの経験を重ねて次のように語ってくれた。

> 私も時々彼女と何処か似たような感情を持つことがありました。私は児童文学を書き、それが人気を博しました。それはそれで素敵なことなのですけれども。でも結果として、私は児童文学作家として知られるようになってしまいました。私の作品の多くは特に大人の読者にむけて書かれているのにも拘わらずに。本当は私のこうした作品は、大人のために書かれた「子供や青少年について」の物語だというのに。でも、それはほとんどいつも児童文学として売り込まれました。(13)

この発言をここに引用したのは、筆者は、次章より本稿が取り上げる *Before Green Gables* と、アニメーション版『こんにちは アン』にみられる相違点のいくらかは、原作者とアニメーション制作者の作品に対する意識のずれに起因すると考えるからである。次章以降論じる通り、*Before Green Gables* を含む彼女の小説の多くは、子供に読者を限定することなく書かれた物語であり、それ相当の作品研究の対象とされるべきものである。で

は、どのように物語の改変が行われたのだろうか。次章では、アニメーションにおける物語の部分的削除・追加、大幅な改変などを明らかにするために、*Before Green Gables* における物語の基本構造と登場人物の人格形成について考えてみたい。

２．*Before Green Gables*：アンをめぐる「大人たち」の自然主義的群像劇

Before Green Gables は、11 歳でプリンス・エドワード島のカスバート（Cuthbert）家の養子となる少女アン・シャーリーが、生後３カ月で両親を失い、彼女を召使いのように扱う二組の貧しい大家族と共に暮らした後に、孤児院に送られるという恵まれない環境にもかかわらず、*Anne of Green Gables* に示される「健全な精神」、「前向きではっきりとものを言う性格」、そして「正義に立ち向かう積極性」をもつ少女として成長した過程を物語化したものである。(14) モンゴメリのアン・シリーズにおける文学世界と同時に、アンの少女時代の時代設定である 1880~90 年代頃のカナダ沿海諸州という外的世界の中でも大きく矛盾しない作品を設計した、ウィルソンの作家としての技量は高く評価されるべきである。(15)

全 71 章からなる原作の構成は、（１）アン誕生以前（第１～６章）、（２）アン誕生後両親の死まで（第７~11 章）、（３）トマス（Thomas）家とのボーリングブローク（Bolingbroke）における生活（第 12 章 ~ 第 26 章）、（４）トマス家とのマリズヴィル（Marysville）における生活（第 27~54 章）、（５）ハモンド（Hammond）家との川の上流における生活（第 55~64 章）、（６）ホープタウン（Hopetown）の孤児院における生活とプリンス・エドワード島への旅（第 65~71 章）の各部に分けられる。ボーリングブロークのモデルとなったのは、当時の交通の要所であったトルロー（Truro）付近、マリズヴィルは鉄道でハリファックスへと向かう途中にあるストゥイアック付近（Stewiacke）、そしてホープタウンはハリファックス近郊である。(16) そして、物語は歴史的に結びつきが深く、19 世紀後半までに鉄道と蒸気船で結ばれ、人と物の交流が盛んな「いとこ同士のような」関係であったカナダの沿海諸州と合衆国のニューイングランド地域（特にメイン州）に収まっている。(17) 原作中の登場人物の行動範囲は、この地域の労働者階級の人々にとっては、中産階級に広まりつつあった鉄道や蒸気船を使った移動が、未だぜいたく品であった時代の人々の行動範囲を反映しているであろう。(18)

ここで作品中に登場する土地の位置を確認したのは、単に地理的位置を確認するためだけではない。モンゴメリ研究者であるベンジャミン・ルフェーヴル（Benjamin Lefebvre）は、書評の中でウィルソンは「モンゴメリのテクストの周縁にあらわれる登場人物に人格を与えること」によって、モンゴメリのパロディや真似事ではない、独自の物語を形成したと評している。(19) しかし、その人物たちは、単に「モンゴメリの物語の周縁」

に存在しただけではなく、当時の「ノヴァスコシア社会の周縁」に生きた人々でもある。そして、作品中、彼らの社会的な位置づけは登場人物の地理的位置と相関して表わされる。

まず、孤児となり、養父母の家を転々としながら孤児院にたどり着くアンは、社会の周縁に存在する人物である。そして、特にアンに対する愛情が皆無であったとはいえないが、大方安上がりな家事労働者としてアンを受け入れた、貧しい養父母の家族も社会の周縁に位置するといえよう。アルコール中毒で転職・移転を繰り返し、家族に暴力を振うバート・トマス（Bert）とその妻で家政婦をしながら家計を切盛りするジョアナ（Joanna）は、７人の子供をもち、成長した３人の娘が家を離れると、今度は幼いアンに息子の面倒を見させる。人里離れたノヴァスコシアの森で木を切り出し、木工所を営みながら懸命に生活するケンドリック・ハモンド（Kendrick）と妻シャーロット（Charlotte）も、８人の子供を持ち、アンはここでも 24 歳で既に神経衰弱気味の養母を助け 11 人分の食事の準備をする。さらに、教養があり、工場労働者の妻の隣人ジェシー（Jessie Gleeson）には「上流婦人」（“the upper ladies”）と看做されても、[20] 医者にその給料の安さを心配される、若く貧しい教員であったアンの両親、ウォルター・シャーリーとバーサ（Walter and Bertha Shirley）とて、[21] 社会の「主流」であったとは言えないであろう。

では、社会の周縁に位置する貧しいアンとアンを取り巻く人々は、作品世界の地図上にどのように表わされるのであろうか。カナダの政治経済の中心であるオンタリオ州に「いい」（“nice”）調度品を持つ実家があったアンの父は、[22] カナダの東の外れにあるボーリングブロークに来て妻と共に死んだ。そして、アンの養父母との生活状況が悪化するにつれて、アンの住まいは都市部や学校などの「制度」から離れ、次第に地理的にも周縁に向かってゆく。バートが飲酒癖の為に鉄道関係の職を失うと、一家は鉄道の駅、師範学校、高等学校、工場があり、家に医者が頻繁に往診できるボーリングブロークの郊外から、アンが「森の中」（“in the woods”）にあると表現したマリズヴィルの家に引っ越す。[23] その家は村の中心部にある複式学級の学校から１マイル程度離れており、[24] 雪が深くなると学校にも行けなくなる。[25] さらに、アンはバートが死ぬと、以前ほど暴力的な環境ではないものの、子供の全員が５歳以下でより仕事量が多いハモンド家に移動する。この実際にはシュベナカディ川（Schebenacadie River）であろう川の「川上」（“up river”）[26] にある「窓付きの納屋」（“a barn, with windows”）のような家は、「かすかな潮のかおりからさえ二十マイル離れた鬱蒼たる森のまんなか」（“in the middle of a dense forest, twenty miles from even a whiff of the sea”）であるのみならず、[27] そこが開拓地であることを示すがごとく、周囲は切り株に囲まれており、隣人は産婆のハガティ（Haggerty）一人だけである。[28] ここは学校や商店がある最寄りの「町」であるクレアバーグ（Clareburg）までは２マイル、[29] アンの足では２時間かかり、鉄道駅カールトン・センター（Carleton

Centre）まではクレアバーグからさらに３マイルあった。[30]

一方、アン自身は三組の双子がいたハモンド家よりも居心地の悪い「ろくでもない場所」（“terrible place”）と考えていたが、[31] 結果的にアンにあこがれのプリンス・エドワード島へと向かわせる機会を与え、アンの運命を好転させる孤児院は、孤児という社会の周縁にある人物を抱えながらも、それ自体が教会という「制度」の内部に存在するのみならず、内部に学校を持っているため、「周縁」と「中心」の境界として理解することができる。そして、それを地図上に可視化するかのように、孤児院は、中心部からは外れているが、アンがボーリングブローク以来見たことのない「二頭立ての馬車」（“carriage”）が走る、ある程度洗練された街にある。そして、孤児院の駅からの距離は、アンがプリンス・エドワード島に向かう際、馬車の旅を満喫できないほどに近い。[32]

さて、アンを取り巻く養父母家族に加えて彼女の隣人たちにも、社会の周縁で必要最低限以外人と群れることなく一人で暮らす「逸脱者」たちが目立つ。アンのマリズヴィルの家からさらに１マイル行ったところには、元教師でありながら恋人と親友に裏切られ森の掘立小屋で鶏を飼い生活するジョンソン氏（Mr. Johnson）が住んでいるし、[33] 自らの大家族を忌わしく思い、独身をつらぬく老産婆ハガティ も「川上」の森の中にぽつんと立つ田舎家に住んでいる。[34] そして、ウィルソンはこうした現代であれば「児童虐待・家庭内暴力加害者」、「依存症患者」、「精神病患者」、「かわりもの」などとして「分類」されるであろうこれらの「大人」たちに、彼らがなぜそのようにしか生きられないのかを、彼らの貧困や心の闇を中心に、環境決定論的に説明し、ひとりひとりを中心人物としても各部が独立した自然主義短編小説として成立するほどに性格づけている。例えば、しばしばアンにつらく当たるジョアンナについては、次のような説明を与え、その存在を単なる端役以上のものとする。

> 感謝されることより叱られることのほうが多かった冷たく厳格な子供時代・・・。バートに心ない言葉を浴びせられ、時にはげんこつが飛んでくると、ますますジョアンナは自身を失い、みじめな気持になっていった。そして、気がつくと、かつての自分の母親のように、娘たちをがみがみとしかりつけていた。[35]

ウィルソンはジョアンナの母のあり様に言及することで、おそらく母もジョアンナと似たような境遇にあり、負の遺産が相続されたことを示唆する。家族の歴史の顕在化である。

結果として、物語は生後３カ月から 11 歳までのアンの成長を軸に進んでいくものの、彼ら大人は明らかにアンの成長の「背景」以上の機能を物語中で担うようになる。このような丁寧な人物描写を積み重ねることで、*Before Green Gables* は、孤児となったアンを含

めて社会の周縁に生きる人々の生き様を描いた自然主義的な「群像劇」となる。作者が本書を「アン」という名前を含まない *Before Green Gables*（『グリーンゲーブルズ以前』の意）と銘打ち、物語をアンに語らせるのではなく、三人称で語るのはそのためであろう。そして三人称で物語を語る際にも、その視点は決してアンに独占されることはなく、物語は他の登場人物の視点からも語られる。

しかしながら、原作小説のタイトルが示していた、本小説の持つアンをめぐる群像劇としての可能性は、アニメーション化以前に、翻訳のタイトルが『こんにちは アン』と設定された時点で失われつつあった。それは、モンゴメリの *Anne of Green Gables*（『グリーン・ゲーブルズのアン』）を『赤毛のアン』として翻訳することにより、読者を「グリーン・ゲーブルズという屋号の農場に住むアン」というアンの周りに生活するものを含む「家庭小説」から、「赤い髪をもつアン自身」を中心とする「児童・少女小説」へと読者の小説の読み方を誘導したのと何処か似ている。[36]

３．『こんにちは　アン～ Before Green Gables』：21 世紀の日本の子供たちのための再話

前章でも言及したとおり、*Before Green Gables* のアンは、プリンス・エドワード島へ行くまでの人生の大半を過ごした養父母の家庭で、自身も子供でありながら、養父母の子供の面倒をみるなど、実質的には「大人」として機能していた。従って、アンが子供らしい時間を過ごすのは、家事の合間、夕食後、そして事情が許した際に断続的に通うことができる学校とその通学時に限られる。この驚くほど短い「子供としての時間」の中で、アンが家庭外の子供と交流する場面は多くない。また、大人の中で育ったアンは、学校に通い始めると現実世界に「友達」を持つことにあこがれながらも、[37] 実際には同年代の者より、教育を受けある種の権威をもった、ヘンダーソン（Henderson）やマクドゥーガル（McDougall）といった教員ないしは、元教師のジョンソンや産婆のハガティに近づき、大人との関係を求めてゆく。

また、筆者は既にこの物語を貧困により生き方を決定された者たちを中心とする自然主義的群像劇としても理解できることを指摘したが、*Before Green Gables* は読者に現実を突き付ける非常に残酷な物語でもある。それは特に二人の養父の死に方に表れる。自責の念に駆られながらも思い通りにならない生活の中でアルコールに安らぎを求め続けた第一の養父は、酔って鉄道事故で死亡する。[38] 第二の養父も「わずかばかりの金は必需品の購入ですべてなくなる。夫婦は精一杯がんばっていたが、仕事に押しつぶされる毎日だった」とあるように、[39] 大家族を養い生活を続けてゆくための過労による心臓発作で命を落とす。

さらに、経済的状況に加え教育の有無も養父母の生き方を決定する要因となっている。

養父母はいずれも、バートが小学校４年の冬で学校をやめたことをはじめ、[40] 当時としてはそれほど珍しくないことかもしれないが満足な教育を受けていない。しかし、彼らの無知もまた家族の困難を深める要因となっている。貧しいはずの養父母の家庭では繰り返し子供が生まれる。このことについて特に女性の側の後悔を伴いながらも家族は膨張しつづける。[41] そしてどちらの家庭も夫の死後、妻が自立し、家族を養う術を持たなかったために崩壊する。この物語の中で、教育が良き生活の条件となっていることは、同じく周縁に生活していた者でも、元教師であるジョンソン氏がアンを通してヘンダーソンと出会い、苦境を乗り越え街に戻り再び教師となることや、勉強好きなアン自身に結果的に幸運がもたらされることからもわかる。ただ、このあたりの筋書きは、後に続く *Anne of Green Gables* が孤児のアンが教師となり幸せをつかんでゆく教養小説であり成功物語であることから必然的であり、また勉強が至上課題である児童向けの教育図書としては適切であろうが、いささか道徳説教調であるとの指摘は否めないであろう。

さて、このような日本から遠く離れた異国の 100 年以上前の「大人たち」の物語を、日本の 21 世紀の子供たちに向けた物語とするために、アニメーション制作者はどのように物語を作り替えていったのであろうか。日本アニメーションのホームページ上のウィルソンの紹介から、アニメーション制作者側がウィルソンを「児童」文学者としてとらえていることは明らかである。[42] さらに、2009 年春から 2010 年新春にかけて、就学前の子供を対象とする雑誌『幼稚園』が「こんにちは　アン　わくわくえいご」というコラムとともに、アニメーションの広告を掲載していたことから、制作者側が視聴者の年齢設定をかなり低くしていたことを察することができる。[43]

児童文化・文学を専門とする陶山恵は、大正時代に『赤い鳥』を創刊者した鈴木三重吉の外国文学の翻訳に対する姿勢、すなわち「ひとつの『原作』を、忠実な逐語訳によって伝えるのではなく」、日本人や子供たちに通じるものにするために、「創作者として『語り直す』」という「再話」行為を、「原作」付きのアニメーションの理解に援用できると論じる。[44] 彼女の議論に沿えば、『こんにちは　アン』の物語は、シナリオ・ディレクター島田満を中心とするアニメーション製作者が、21 世紀の日本の子供たちのために、*Before Green Gables* を再話したものであると理解できる。本章では実際にどのように再話が行われ、それがいかなる効果を持つのか、主要な点について検証してゆきたい。

第一に、日本のアニメーション視聴者にむけて再話するにあたり、物語は現在では少なくても 30 代に達しているであろう、かつての『赤毛のアン』の視聴者、すなわち、『こんにちは　アン』のターゲット視聴者と共にテレビを視聴するであろう親のグループに対しても、矛盾しない作品でなければならない。『赤毛のアン』は翻訳同様、「アン」を中心としたアニメーションとして創られているから、『こんにちは　アン』も原作中のアンの描

かれ方や位置づけに拘わらず、アンを中心に据えた物語とする必要がある。その結果、原作では冒頭に全71章中11章を割いて表現されたアンの両親に関する情報は大幅に削減されている。このアンの両親に関する情報の削減により、『赤毛のアン』では自明のものとして語られる、アンの「孤児」という側面が強調される。第1話のタイトルも両親のことには全く触れない「赤毛のアン」である。(45)

第二に、作品中の地理的設定が大幅に書き換えられている。例えば、原作中アンを自分の子供のように世話していたトマス家の長女イライザ（Eliza）は、ロジャー・エマーソン（Roger Emerson）と結婚して、彼の家族の住む隣州ニューブランズウィック州のファンディ湾岸に位置するセント・ジョージ（St. George）に移転する。ボーリングブロークからは当時の馬車、鉄道、蒸気船、いずれの交通手段を用いても、日帰りすることができる距離ではないが、かつてはひとつのノヴァスコシア植民地であった二つの州に人物の交流があったことは不思議ではない。(46) しかし、アニメーションの中では、知名度の低いニューブランズウィック州への言及は全くなく、二人はイギリスのロンドンへと移転する。同様に作品中には出身地が触れられていないジョンソン氏もアメリカ合衆国のボストン出身という設定にされている。(47) これらの改変はカナダ沿海諸州の地理に明るくない多くの日本人にとってイメージしやすい地理的言及点を与える為であろう。しかし、このような改変は、確かにストーリーを楽しむためには必要なのかもしれないが、作品の展開する階級や時代における世界観をゆがめるものであり研究者としては少し残念でもある。

第三に、平凡な婚約や結婚がシンデレラ・ストーリーとして改変されている点が挙げられる。ロジャーとジョンソン氏は共に作品中に結婚ないしは婚約する。原作ではロジャーの経済状況について定職に就いていること、ならびにジョンソン氏が移転後に学校に勤務するであろうことが示されているが、二人の男性が経済的に豊かであることは全く述べられていない。むしろ、結婚式に遠方を理由に家族が一人も出席していないロジャーや掘立小屋で生活していたジョンソン氏が裕福であるとは考え難い。しかし、アニメーション中で二人はそれぞれ裕福な家庭の息子として描かれており、二人と結婚することにより女性が地位を向上させるシンデレラ・ストーリーに書き換えられている。また、原作中では表面化せずに示唆されるにすぎない二つの恋物語は大々的に前景化される。

第四に、日本で知名度の高い物語との間テクスト性の構築が行われている。特にアニメーション中のジョンソン氏の書き換えの方法は興味深い。アニメーション中でジョンソン氏は、友ではなく兄に婚約者を奪われ隠遁生活に入ったボストンの実業家の息子でチェリストという設定である。さらに一人暮らしの小屋の中でチェロを弾く変わり者の青年という設定は、同じく日本アニメーションによりアニメーション化された、宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」の主人公で、水車小屋に一人住むチェリスト、ゴーシュを喚起する日本な

らではの間テクスト性の利用といえよう。[48] 画像的にも水車のイメージを喚起するかのごとく、ジョンソン氏の小屋には車輪が立てかけられている。そして、ひげをそり身支度を整えたジョンソン氏のハンサムな風貌の映像化は、民話『シンデレラ』やアンデルセンの童話『醜いあひるの子』を思い起こさせる。[49] こうした日本の子供の間でよく知られている他のストーリーとの間テクスト性の構築は、未知の外国文学をより親しみやすくし、娯楽性を拡張するとともに、芸術的にも作品を豊かにする効果をもつといえよう。

第五に、既に指摘した *Before Green Gables* 冒頭部分の削除とは反対に、大幅に書き足された部分がある。それは、原作中、アンの大人との触れ合いや空想上の友達であるケイティ・モリス（Katie Maurice）やヴィオレッタ（Violetta）に比べて、あまり強調して書かれることのなかった、学校における同年代の子供たち、すなわち現実の「友達」との触れ合いである。特に、大きな物語の書き足しや改変が行われたのがマリズヴィルの学校と孤児院における子供の生活である。同じ１年生で隣の席のサディ（Sadie）の境遇は大幅に書き換えられている。原作中ではアンの一番の友達であるサディですら名字を与えられておらず、学校から半マイルのところに住んでおり、アンと同じくらいみすぼらしい恰好をしていながらも、アンの分まで糖蜜のクッキーを作ってくれる母がいるという程度の情報しか与えられていない。[50] また、原作中アンはサディに家に誘われても家事が忙しいため遊びに行くことができない。しかし、アニメーションの中では、原作中には存在しない教室でのミルドレッド（Mildred）のカメオ盗難事件の真相を探るために、アンはサディの後をつけて彼女の家に行く。その結果、サディの家庭はアンの目をとおして共感的に描かれることになる。ここで、サディは父を失い病弱な母と祖父、そして弟と生活する、アンと境遇を共有する「仲間」として肉づけされる。アニメーションの中ではサディはアン同様に家事の為にあまり学校に来ない少女として描かれることも、「ひとりぼっち」のアンに仲間を作るためであろう。[51]

さらに、原作中アンがひそかに憧れた賢くきれいな身なりのミルドレッドと勉強が苦手で６年生を何度か落第して学校を退学するランドルフ（Randolph）は、滑稽でみすぼらしいながら賢く、教師の注目をあつめるアンを妬み、いじめる。そして、彼らはアンがマリズヴィルを去るまで直接和解することはない。しかし、教室でも付かず離れずの関係で、辞書を持っていることや身なりがきれいであることから裕福なのであろうと推測できる程度の存在であった二人は、アニメーション中、愛情に飢えた市長の娘と、自らの進路に悩む牧場ビジネスを成功させた父の息子としての位置づけを与えられる。そして、アニメーション制作者側で書き足した学校劇の上演を中心とする様々な学校の活動や放課後の交流などを通して、アンと二人は次第に和解してゆくのである。また、ランドドルフはアンとの交流の中で家畜に興味を見出し学校にとどまる。[52]

アンは孤児院でも、ミルドレッドに相当する役割を担う人物エドナ（Edna Godfrey）に出会う。原作中、友達だと思っていたエドナに裏切られたアンは、作品の終わりまで彼女に対して無関心を通す。しかし、アニメーションではエドナとアンは、やはり子供同士の交流を増やすために、新たに書き足された窃盗事件や喧嘩を通して関係を修復する。また、エドナは母親に捨てられたという設定になっており、ここでもアンがどこか共感することができる者として描かれている。[53] このように新たに書き足された子供同士の触れ合いは、幼い視聴者に「友は傷つけあいながらも学び和解してゆく」という教訓的模範を与えようとしているように思われる。

そして第六に、アニメーションにおいては、仲の悪かった子供同士の人間関係が最終的に修復されたことにも表われるように、アンが憧れていたプリンス・エドワード島に行くチャンスを得る以外は、悲劇の連続であった原作の物語が、全体的にハッピーエンドとなるように改変されている。原作では、明るい要素と言えば、実際には書き込まれていない婚約、結婚したカップルの明るい未来を「想像」することができる程度である。原作において語り手が「愛する人々に出て行かれたり、裏切られたりしたとき、どんな気持ちになるか考えてみたらいい。愛する人がふいに人生から消えてしまうこともある」と、[54] 孤児院に辿りついたアンの意識の中を描き出す通り、誕生以来アンの周りでは一貫して不幸が続き、その都度アンは捨てられる。アンを引き取りたいと感じていたバーサの友ジェシー、イライザ、ハガティのいずれもがそれを実行せず、一度遠く離れてしまうと、かつて共に暮らした養父母の家族たちがアンを懐かしんで思い出すような記述も一度たりともない。アンは彼らにとってその程度の存在であったのである。しかし、アニメーションの最終話では、音信不通でアンを捨てたかのように見えたイライザやジョアナからは、実は何度もアン宛に手紙や小包が届いていたが、度重なる引越しの為に配達先不明の状態になっていたことが明かされる。そしてジョンソン氏と身重の妻はアンを孤児院で見つけ出すことにも成功する。[55] この物語の最後の付け足しによって、捨てられ続けた少女、アンの悲劇は「実はずっと愛されていた」という喜劇に反転し、アニメーション『こんにちはアン』は、教育効果をもった娯楽作品として視聴者に、「不幸に耐え、頑張りつづければ報われる」という教訓と共に一種の安息を与えて物語を終える。

むすびにかえて

本稿はバッジ・ウィルソンの小説 *Before Green Gables* と、同小説を原作として日本アニメーションが制作したアニメーション『こんにちは　アン～ Before Green Gables』を比較し、そこに現れるストーリー上の違いを考察した。そして考察を通して、英語圏の大人

を含む広い読者層に向けて書かれた、アンの成長を軸にした大人たちの自然主義的な群像劇 *Before Green Gables* が、オーディエンスを日本の 21 世紀の子供とその親たちに変え、再話されることによって、「子供としてのアンの生活」を中心に置いて強調し、ヒロインが悲劇や苦難を努力と学習で乗り越えて幸福をつかむ少女小説的ないしは教養小説的な娯楽作品に変化したことを指摘した。

小説 *Before Green Gables* とアニメーション『こんにちは アン』が、異なるメディアを用い、異なる言語で、異なるターゲットの為に作られた、全く異なる作品であることを、理解しなければならないことは当然である。しかし、アニメーションは大幅なストーリーの改変の結果、*Anne of Green Gables* の続編である以前に、19 世紀後半のノヴァスコシア社会の周縁を、愛情を失うことなく誠実にそして懸命に文学世界中に再構築しようとした原作の精神を失ってしまった。そして子供向けではなく一般向けの文学作品としても評価されるべきウィルソンの小説が、子供向けに再話されることで、またしても大人の読者の食指から遠ざかる可能性があることは、カナダ文学を研究する者として悔やまれる。

註

（1）竹内オサム「『鉄腕アトム』、アニメのアニメ化―テレビアニメおよび漫画の分身」『アニメへの変容―原作とアニメとの微妙な関係』竹内オサム・小山昌宏編（現代書館，2006），37-62.

（2）「世界名作劇場」『Nippon Animation Official Home Page』http://www.nippon-animation.co.jp/work/index.php?w=1. 筆者は2011 年 1 月23 日に閲覧した。

（3）本稿は原作小説の一次資料として、Budge Wilson, *Before Green Gables* (Toronto: Penguin, 2008) を使用する。また、読みやすさを優先するため、原稿中の引用等は同書の宇佐川晶子訳『こんにちは　アン』全２巻（新潮社, 2008）を使用し、必要であれば原文を追記する。

（4）本稿ではDVD、谷田部勝義監督『こんにちは　アン～Before Green Gables』全13 巻（バンダイビジュアル, 2009-2010）を使用する。以下、脚注ではDVD と表記する。

（5）Lucy Maud Montgomery, *Anne of Green Gables* (Boston: L.C. Page, 1908). 翻訳は多数存在するが、新しい訳の一例として、掛川恭子訳『赤毛のアン』（講談社, 2005）を挙げておく。また、アニメーション作品はDVD にもなっている。高畑勲監督『赤毛のアン DVD メモリアルボックス』全12 巻（バンダイビジュアル, 2010）を参照されたい。

（6）“Author Writes a Prequel to *Anne of Green Gables*,” *Nova News*, accessed 22 January 2011; available from http://older.kingsjournalism.com/nnn/nova_news_3590_14143.html.

（7）Budge Wilson, in conversation with the author, 28 July, 2010. 本章で言及されているウィルソンに関する情報は、筆者とのインタヴューの他に、彼女のマニュスクリプトを所蔵しているダルハウジー大学やノヴァスコシア作家協会などのウェブサイトなどに掲載されているバイオグラフィーも参考にした。“The Archives of Budge Wilson: A Guide,” *Dalhousie University*, accessed 22 January 2001; available from http://www.library.dal.ca/DUASC/FindingAids/MS_2_650; “Brief Biography,” *Writers' Federation of Nova Scotia*, 2010, accessed 22 January 2011; available from http://www.writers.ns.ca./Writers/W/wilsonbudge.html.

（8）Budge Wilson, *The Best/Worst Christmas Present Ever*（Toronto: Scholastic, 1984）.

(９) Budge Wilson, *The Leaving*（Toronto: Anansi, 1990）.
(10) Budge Wilson, *Friendships*（Toronto: Penguin, 2007）.
(11) Wilson, in conversation with the author.
(12) 前出の*The Best* 以外の、ロリンダ・シリーズの書籍は出版順に以下の通り。Budge Wilson, *A House Far From Home*（Toronto: Scholastic, 1986）; *Mystery Lights at Blue Harbour*（Toronto: Scholastic, 1987）; *Thirteen Never Changes*（Toronto: Scholastic, 1989）; *Lorinda's Diary*（Toronto: Stoddart, 1991）.
(13) Wilson, in conversation with the author. これまでウィルソンが多くの場合、「児童・若者向けの作家」として評価されてきたことについては、彼女の本を出版しているペンギン社のウェブサイトに掲載されたウィルソンの受賞歴に端的に示される。"Budge Wilson," *Penguin.ca*, 2002-2011, accessed 22 January 2011; available from http://www.penguin.ca/nf/Author/AuthorPage/0,,1000051048,00.html. モンゴメリについては、松本侑子『「赤毛のアン」―背景を探る』（集英社, 2000）, 159-79.
(14) "Wilson Tackles 'Daunting' Prequel to *Anne of Green Gables," CBC NEWS,* 11 Feb 2008, accessed 23 Jan 2011; available from http://www.cbc.ca/arts/books/story/2008/02/11/ green-gables-prequel.html.
(15) 赤松佳子「刊行百周年を機に読み直す『赤毛のアン』」『奈良女子大学文学研究教育年報』第６号（2009）: 37-46; Elizabeth Rollins Epperly, *Imagining Anne: Island Scrapbooks of L.M. Montgomery* (Toronto: Penguin Canada, 2008), ７; 松本, 10.
(16) 作品中の土地設定についてはインタヴューより。Wilson, in conversation with the author.
(17) Wilson, *Before*, 293. 宇佐川訳, 下巻105.
(18) この時代のノヴァスコシア交通や観光の状況については以下の論文が参考になる。
Jay White, " 'A Vista of Infinite Development': Surveying Nova Scotia's Early Tourism Industry," *Journal of the Royal Nova Scotia Historical Society* 6（2003）: 144-69.
また、モンゴメリより14年早く生まれ、ほぼ同時代を生きた、ニューブランズウィック州出身の作家チャールズG.D. ロバーツ（Charles G. D. Roberts 1860-1943）によって、1890年代に書かれた沿海諸州の旅行ガイドブックも参考になる。Charles G. D. Roberts, *The Canadian Guide-Book, The Tourist's and Sportsman's Guide to Eastern Canada and Newfoundland*（London: William Heinemann, 1892）; *The Land of Evangeline and the Gateways Thither*（Kentville: Dominion Atlantic Railway, 1895）.
(19) Benjamin Lefebvre, "Eternally Anne," *Globe and Mail*, 22 March 2008, D9. 拙訳。
(20) Wilson, *Before*, 13. 宇佐川訳, 上巻24.
(21) Ibid., 23. 宇佐川訳, 上巻８.
(22) Ibid., 62. 宇佐川訳, 上巻92.
(23) Ibid., 305. 宇佐川訳, 下巻、121.
(24) Ibid., 172. 宇佐川訳, 上巻242.
(25) Ibid., 262. 宇佐川訳, 下巻59.
(26) Ibid., 288. 宇佐川訳, 下巻98.
(27) Ibid., 293. 宇佐川訳, 下巻103.
(28) Ibid., 309. 宇佐川訳, 下巻127.
(29) Ibid., 317. 宇佐川訳, 下巻138.
(30) Ibid., 327, 383. 宇佐川訳, 下巻151, 229.
(31) Ibid., 403. 宇佐川訳, 下巻255.
(32) Ibid., 390, 431-32. 宇佐川訳, 下巻237, 292.

(33) Ibid., 150, 155. 宇佐川訳, 上巻212, 218.
(34) Ibid., 324. 宇佐川訳, 下巻148.
(35) 宇佐川訳, 上巻44-45. 原文は次の通り。“She had gone from a cold, strict childhood, during which she had been scolded more often than thanked. . . . Bert's verbal and sometimes physical abuse made her feel unlovely and unlovable. She watched herself being as cross and strict with her own daughters as her mother had been with her.” See Wilson, *Before*, 26-27.
(36) 山本一雄「『緑の切妻屋根の家のアン』と『赤毛のアン』の間ーアンの養父母の役割」『石川工業高等専門学校紀要』第22 号 (1990): 137-18.
(37) Wilson, *Before*, 71-72. 宇佐川訳, 上巻105-107.
(38) Ibid., 278-80. 宇佐川訳, 下巻81-85.
(39) Ibid., 350. 宇佐川訳, 下巻183. 原文は次の通り。“He earned what small amount of money they had, and then spent it on necessary things.”
(40) Ibid., 24. 宇佐川訳, 上巻41.
(41) Ibid., 73, 292-94. 宇佐川訳, 上巻 108, 下巻 103-7.
(42)「作品紹介」『世界名作劇場第26 作品　こんにちは　アン～Before Green Gables』http://www.nippon-aniation.co.jp/before_GG/intro.html. 筆者は2011 年 1 月24 日に閲覧した。
(43)「こんにちは　アン　わくわくえいご」『幼稚園』2009 年 5 月号～2010 年 2 月号を参照のこと。
(44) 陶山恵「『白雪姫』の変容ーグリム童話からディズニー・アニメーションへ」『アニメ』, 151-54.
(45)「こんにちは　アン」DVD 第 1 巻、第 1 ～ 3 話「赤毛のアン」、「アンという名前」、「小さな黄色い家」を参照のこと。
(46) Wilson, *Before*, 90; 宇佐川訳, 上巻 129.
(47) ロジャーについては、DVD 第 2 巻、第 5 話「エリーザの恋」、第 6 話「希望は生まれる」を参照のこと。ジョンソンについてはDVD 第 6 巻、第18 話「恋のゆくえ」を参照のこと。
(48) 宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』（角川書店 , 1997）. 高畑勲監督『セロ弾きのゴーシュ』（ブエナビスタ　ホームエンターテイメント , 2006）.
(49) H.C. アンデルセン『醜いあひるの子・他=The Ugly Duckling and Other Tales』来住正三・佐藤若菜訳（南雲堂, 1963）. DVD 第 7 巻、第20 話「危険な罠」を参照のこと。
(50) Wilson, *Before*, 188. 宇佐川訳, 上巻 264
(51) DVD 第 5 巻、第13 話「サディという友達」を参照のこと。
(52) DVD 第 5 巻、第14 話「ランドルフの夢」、第 6 巻、第17 話「私たちの舞台」、第 7 巻、第19 話「悲しいお茶会」を参照のこと。
(53) DVD 第11 巻、第32 話「最悪の始まり」～第13 巻、第39 話「プリンス・エドワード島へ」を参照のこと。
(54) Wilson, *Before*, 405. 宇佐川訳 , 下巻 258。“Just consider how she had felt when those people had left her or betrayed her. Or just simply dropped out of her life.”
(55) DVD 第13 巻、第39 話「プリンス・エドワード島へ」を参照のこと。